

「支え」としてのコモンを問い直す  
～『ゆたかな学び』のための社会づくり』研究委員会報告～

菊地 栄治 (同研究委員会委員長 早稲田大学)

子どもを取り巻く生育環境や教育現場の状況は、ますます困難さを増している。新型コロナウイルスの感染拡大は波状的に繰り返され、ウィズ・コロナの適応様式を身につけていくと同時に、小さくされている人たちのしんどさは深刻化し一層見えにくくなっている。まさに他の自然災害と同じように、「災害弱者」が社会的に生み出されていく。ときあたかも新自由主義（資本主義の「変異種」）が蔓延するグローバルな経済秩序のもと、金融資本主義が近代の断末魔のごとく日本社会を席卷していたまさにその時代に…。ちっぽけなウイルスは、不都合な真実を次々に暴露している。

たとえば、今回のパンデミックはすべての地域で感染が収まらない限り完全終息にはいたらないようにも思える。先進諸国の人たちが我先にとワクチンを独占的に接種したところで、置き去りにされた感染地域で新たな変異種が生まれ、再び人類全体のリスクとなる。加えて、私たちの生活の拠り所となる経済基盤は、人と人との身体を通したやりとりを通して辛うじて成り立っていたことも浮き彫りになった。他方、テレビを中心とするマスメディアを通して消費が煽られ利権がつくられるという「闇」も暴き出した。このような時代に頼みとすべきは、空虚な金融空間とは真逆のローカルな生産と流通とケアをめぐる人間の手による等身大の労働（支え合い）なのかもしれない。

転じて、学校の現実はどうか。端的に言って、依然として資本主義と国民国家の道具

であることをやめていない。「遅れを取り戻せ」と悉皆方式の全国学力調査も復活した。

「個別最適な学び」は「協働的な学び」で相殺されるというよりも、交換価値を生み出す生産的な何者かになることを強いる。「主体性」重視が内面統制として実践され、最終的には点数化・序列化されていく。疑われることさえない呪縛の構造と共同幻想を解体し、「ゆたかな学び」(特定のだれかとして出遇い対話しつつ相互的主体としていっしょに生きること自体を先立てることによって生成される学び)を構築していくことが切実な課題となる。加えて、「ゆたかな学び」を絵空事で終わらせないためには、その「支え」となるコモン(富の再分配等による物質的基盤の回復を中心としながらも、アソーシエーティブな関係性の中で創り出される「支え」も含めた諸資源)を協働生成しなくてはならない(生存保障を中心とし、地球との物質代謝をめぐる課題の解決も必須である)。研究委員会では、経済学、人類学、社会学、教育学などの個別科学を越境するだけでなく、子どもの世界に近い実践の現実との対話を通して、新型コロナウイルスをもうならせるような、「ハイブリッド社会・経済政策」の提案を目指している。

未知への挑戦がどこまで実現できるかはわからない。折に触れて発信させていただくことになるが、その際には忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いである。あちこちで生まれる分断がよりよい方向でつむぎなおされる動きを加速させたい。